

2009年5月15日
第182号

題字 住谷悦治



BOOK	京都労働運動史 (年表・資料 第6巻 7 総会案内 / 情報スクラップ / 編集後記 12)										
連載	占領下、京都の青年団運動を語る (下)										
連載	京都府職組の建設期と府職労安保闘争弾圧事件 (上)										
連載	山本宣治生誕120年・没後80年で記念出版										
連載	東山の福祉と革新の源流を探る懇談会 発足										
連載	悼・塩田庄兵衛さん										
連載	沖縄に送られることを覚悟した学生の一人として 忘れ得ぬ人・松村茂さん										
西山秀尚	伊藤晃	岩井哲英	小畠忠雄	湯浅俊彦	8	10	9	8	7	4	2

この一枚
〔連載〕 「夕刊京都」創刊号 1946年5月11日



1946年5月11日午後、創刊号（5月12日付定価15銭）が発行された。当時、京都新聞論説部長だった住谷悦治と能勢克男、和田洋一ら戦前の「土曜日」のメンバーが中心だった。

創刊の辞ともいうべき「なぜこの新聞は生れたか？」は「焼けなかつた、たつた一つの都市なればこそ、京都は全国の諸都市にさきがけて、いちはやく、自分自身を徹底的に民主的、平和的な市に、その市民を革命的民主主義者に、きたへ上げて行かねばならぬ」との認識のもとに、「真に民主的な、自由な市民生活の根底には、この真実をかくさず、ありの俗に知るといふことが、どんな場合にも確保されていなければならぬ」とした。

第一面トップ記事は「解放せよ！／飢える人民に戸閉す／ひろびろとした大邸宅、お寺、社の境内／男女の逢引場より烟だ」。以来、この新聞は1950年のレンド・バージ（11人解雇）まで東京の「民報」（松本重治社長、長島又男・中西功ら）と並ぶ最左翼の夕刊紙として全国的にも知られた。

執筆者紹介

西山秀尚（にしやま・ひでたか）元日本共産党京都府議団長。元京都府連合青年団・日本青年団協議会幹部。伏見区在住。

伊藤晃（いとう・あきら）自治体問題研究者、自然资源学者。元京都府職員労組執行委員。左京区在住。

伊藤哲英（いとう・てつひで）元京都府立高校教諭。東山区在住。

岩井忠熊（いわい・ただくま）本会代表。立命館大学名譽教授。右京区在住。

小畠忠雄（おばた・てつお）「原爆展」掘り起しの会世話人。八幡市在住。

湯浅俊彦（ゆあさ・としひこ）本会世話人。「燎原」編集担当。京都府大山崎町在住。

「市民を革命的民主主義者に」

燎原社

（京都の民主運動史を語る会）

代表 岩井忠熊

事務局

京都市左京区高野東開町1-23

第三住宅33-302 井手幸喜

〒606-8107

tel & fax 075 (722) 3823

占領下、京都の青年団運動

を語る（下）
08年12月例会の報告



西山 秀尚

（元日本共産党
京都府会議員団長）

青年学級振興法反対と 沖縄返還運動

戦時中の青年学校が戦後なくなつて、青年学級というのを自主的につくり、社会問題などをいろんなことを勉強する。私の住んでいた淀では新聞に書いてあるカタカナが何のことか分からんと「カタカナを読む会」をつくつたりしました。社会全体の流れもということで「新聞を読む会」もつくりました。いろんななかで青年学級が運営されていたのです。私が、53年の青年学級振興法で、政府の指導で昔の青年学校にしていこうという動きが目立つてくるんです。私たちは猛反対をして、大会で振興法に反対の意志を決めたのですが、このころから日青協も全体として変わりだしました。

私は、全国の青年団が変わつていく一番の問題は沖縄問題だと思つています。いろんな団体があるなかで、占領下にあつた沖縄を団体加盟させたのは日青協が最初です。日青協から沖縄へ行かせると必ず変わつて帰つくるのです。伊江島全体がアメ

リカに接収されていて、島の人たちが全島的なデモをやるのを見て帰つてくる、基地を見て帰つてくる。日

青協が呼びかけ、中心になつた沖縄の祖国復帰運動、途中から名前を変えて沖縄返還国民運動となります。が、この時、総評の基地対策全国連絡会議（基地連）にいたのが、のち京都民報社の専務理事となつた故田上久信さん、田上さんと私とで沖縄返還国民運動連絡会を組織して、いろんな団体、いわゆる右翼の連中も全部入れて組織していった。日青協は偏つたらいかんという方針で運動をしていましたからね。右翼の健青会まで入つてきたのです。

エピソードはいろいろあります。が、新聞に岩国市が基地反対闘争を決議した、と書いてあつたのでこれは面白いと飛んでいった。団

にやれたんですね。

青年学級振興法に反対を決めたことと沖縄返還運動に取り組んだ、大きな要因だと思います。この後もアメリカからいろいろな攻撃がありました。買収と言つていいのでしょうか、「道徳再武装運動」（MRA）ここで教育していくんですね。

余談ですが、広島県の君田村で、アメリカ軍の低空飛行に村長以下反対していましたが、あの人たちは、当時の青年団の人たち。また、高知の幡多郡で県会議員として頑張つていたり、西土佐村の各種団体もほとんどが青年団の卒業生で、こちらも平和運動に邁進しているのはご存じのとおりです。

青年団の綱領づくり

話を少し戻しますが、1951年当

時、共産党員も大分増えて、青年団はこれでいいのかと、いうことが全国的に問題になつてきていたんです。

それまではシヨンシヨン青年団といつて、前に述べたI.F.E.Lでレクレ

ーション、ディスカッショング云々と

教えられていましたが、政治、生活と無関係な団体でいいのか、そこで、京都が綱領をつくるうと、いろんな援助を頂いて「我々青年は限りなく郷土を愛する。新しい村づくり、町づくり、国づくりのために」というスローガンを生み出すのですが、国づくりのためにでは大論争になつた。結局「国づくり」が入ることになりましたけど。

もうひとつ論議になつたことがあります。山形県、戦後は生活つづり方運動で、特に無着成恭で有名になりましたが、ここは青年の要求を全部取り上げたのです。働きながら学ぶために青年学級振興法をつくれ、農村の次男、三男対策のために産業開発青年隊をつくれ、事実から出発しようという点では一致しますが、

出ることだけ話をしようという立場なんですね。我々は出来んことをはつきりさせて、そこへ行くにはどうしたらしいのかも含めて考えようという立場、だから、やまびこ学校の人たちは、卒業したら自民党に入るもののが多かったのだろうと思います。

働きながら学ぶ青年の要求は大事なんですが、出来ることだけをやろうとした時、政府に頼らなければならんし、青年学級振興法では政府から金を出してもらう。産業開発青年隊を政府につくらせよう、ダム建設の労働をさせながら土木機械のノ

ウハウを教えようと、こうなるんですね。当時、青年団が歌つたり踊つたり、弁論大会や体育大会などをやっていたなかで、山形と京都の青年団はこれではいかん、新しい青年団にしないといかんということは共通したのですが、考え方は割れてしまつた。

青年学級振興法がとおつた後、勤労青年教育基本要綱を私たちがつくつて、青年学級に対置して共同学習をするすめると決めたのですが、この時も二つの意見が出た。出来ることを決めようというのが山形流で、それはけしからんというのが京都流。1955年前後だつたか、久野収先生が『思想』だつたか『思想の科学』だつたか記憶がはつきりしないのですが、「プラグマチスト」と「マルキスト」の共同と競争と書かれているのを読んで、これに近いな、と思ったのですが、いずれにしろ山形と京都は仲良くせなあかん、仲良くながらもこちらはこちらの立場でとういうことでやつてきました。

野中広務君の近著にふれて

京都の組織のことですが、1952年の大会で野中が策動し、青少年指導顧問の協力で、京都府青年団体連合会（京青連、47年3月の発足当時は京都府青年団体協議会で49年の大会で名称変更）の分裂と闘つたともふれておかなければならぬと



写真は府下の農村を行く文化工作隊の青年たち（1949年）

=湯浅貞夫『目で見る京都の民主運動史』（かもがわ出版）より

思っています。野中君は分裂組織をたちあげるのですが、入つたのは乙訓郡と園部町だけでした。最近自叙伝といえるもので、4市が自分たちの側についたと書いていますが、当時京都には市が4つしかなかつた、京都市は別組織でしたので、福知山、

宇治はこちらの拠点ですから全くのデマもいいところです。分裂策動は失敗したのです。その年の5月の日青協（日本青年団協議会）大会で、先ほど言ったように青年学級振興法反対を決めますが、驚いた文部省と日本青年館が私たちを除名して、野

長だつた塚本三郎が団長だつた愛知などが、加盟している私たちに内緒で分裂の実態調査に来た。私たちのところには来ないで野中の話だけ聞いて、日青協理事会で嘘八百の報告をしようとしたのですね。加盟している私のところには調査に来なかつた、日青協の加盟団体は各県ひとつのみだ、野中のところは実質上一町一支部だけではないか、このことを3時間喋りました。他の議題もあるからええ加減にしてくれ、ということで調査はなかつたことにしようと。結局、議題にさせずにその陰謀を粉碎できました。

園部の大会の時には私が壇上でいさつ、八木の青年団がマイクの前で防衛してくれましたね。「燎原」の世話を永くやつた湯浅貞夫君もこの時「脱退ではなくに断固京青連を守る」つて頑張つてくれましたよ。

『戦後京都の歩み』の際には幾つか訂正を必要とする箇所はあります。が、論旨は今でもそこに書いたとおり、1960年代になつて農村が大きな変貌を遂げ始めるまでは、京都における統一戦線の運動や全国の青年団の運動で果たした役割は大きかつた、そう思つています。

（文責・井手幸喜）
（テープライター・馬原郁）

京都府職組の建設期と

府職労安保闘争弾圧事件 ——自分史と重ねて振り返る

上

伊藤 晃

元京都府職員労働組合執行委員
自治体問題研究者

本稿は京都府職員組合と日本共産党府庁細胞の建設期を中心にその歴史と、私の所属した保険支部の闘争、とくに60年安保弾圧事件の経過とその問題点について述べてみたい。

1949年、府庁に入る

私が京都府庁に入ったのは1949年10月24日であった。当時、府職は大きく揺れ動いていた。それは、全国の労働運動に激しく襲いかかったレッド・ページの生々しい傷痕を職場に刻みつけていたからであった。その二ヶ月前の8月24日に、府職の幹部四名のレッド・ページが強行され、免職処分を受けた人たちを守るべき府職は、臨時大会で執行部提案のレッド・ページ反対闘争の決議が否決されていた。

当時、府職の書記長であった松村裕氏ら執行部は、その責任をとつて総辞職し、松村氏は出身の民生部保険課（健康保険などを管轄）の職場に帰っていた。それに替わって組織された本部執行部は、職制の支持を陰

に陽に受けているようであった。松川事件・下山事件をはじめとする謀略事件がこの年の七月から八月にかけて相次いで起きていた。このような世相を反映してか、私の入った保険課の職場は大変に暗かった。貧困の中で育ち、青年特有の闘争心を抱いていた若い私にはこのような職場の状況に少なからず傷つけられた。実際、私の椅子・机は「行政機関職員定員法」によって剥がされるようになってしまった若い女性の席であつたことを聞かざれ悲憤の情を抱いた。職場に労働組合の組織がなかったのは勿論のことだった。

新劇運動に情熱

私は、東京に進学を希望していたが、父を亡くして母と暮らさなければならぬ現実におかれていいたため、やむを得ず就職の道を選ばざるを得なかつた。京都府庁への就職は取りあえずの「腰掛」にすぎなかつた。

そこで、私が当時、打ち込んでいた新劇運動をこの新しい職場で生かして「全京都民主戦線統一会議」が結

すこととした。職員寮（今は無いが当

時に上立通り東入に民家を借りた建物、その後、出水通り西に「松屋旅館」が職員寮としてあつたで、林想、岩村一夫、吉田俊大氏など京都

の演劇界の最高の指導者をお呼びして新劇論、文学論、俳優術、化粧の勉強、実技の研究・討論を盛んにこなっていた。ゴーゴリーノの「外套」、チエーホフの「知恵の輪」、ブレヒトの「シモーネ・マシャールの幻覚」などのヨーロッパの作品や、日本の久保栄の「火山灰地」、木下順二の「夕鶴」「彦市ばなし」などをとりあげていた。

この頃、保険課から吉村幸雄氏が府職本部の情報部で「府職新聞」の編集を担当させていた。

1951年の府職本部執行部の改選期。当時、私は演劇活動に燃えており辞めるつもりはなかつた。しかし、松村裕（保険課）と伴茂（教育委員会）両氏から熱心に推薦されて、どうとう本部執行委員になつた。そこで一年間、文化部長を務めた。この間は、囲碁、茶道、野球、テニス、演劇のサークルの結成や充実のため一心に活動した。初めての執行委員として本府の職場を中心に報告や演説してまわり、結構忙しい活動であつた。

一年間の本部活動を通じて肝心の職場に労働組合組織を確立することの必要性をいやというほど、私に教えてくれた。翌1952年の改選期

成され、高山市長（二月）、鰐川知事（四月）の革新コンビの首長が出現した。演劇活動の帰路、鰐川候補の乗つた宣伝カーに「頑張れ！」と手をあげてある種の溜飲を下したものであつた。鰐川知事は登庁したとき濃紺の、いくらかだぶついた背広に身をつつんで例によつて体を元気よくゆき、府庁正面玄関にあがつてきたところで出あつた。知事の満面の笑みの中に激しい闘魂を感じた。

官僚性と保守性に満ちた旧木村府政の歪みはその後、大きく正されていく。

には、私は職場に戻り、松村・伴氏らと相談して、清水草太郎氏(保険課)を本部執行委員として送り出すこととなつた。書記次長としての役割もあって所詮、実力専従であつた。組合運動の発展を強く願つてゐた松村氏の一貫した態度は忘ることはない。今は亡き松村氏はその後、企画管理部の幹部職員となり、芸術振興課、地方事務局長などを経て最後は私が嘱託としてつとめた総合資料館の館長を勤められた。

私の組合活動——その原点として共産入党

府職組合員が数人しかいなかつたので、まずは組合員のさまざまな要求に基づく活動を始める。

私は、就職直後に日本共産党に入党していた。1950年2月であつた。入党推薦者は身近に党員がいなかつたので中京区松原通壬生川西入北側にあつた京都府委員会を訪ね、当時唯一人の府会議員であつた春藤誠一氏に入党の意思と決意を告げ推薦状を書いて頂いた。そしてその足で当時、私が関与していた京都自立劇団協議会で一緒に活動してゐた島津製作所の「歯車座」の澤田さんのところに赴いて入党の推薦をお願いした。彼は私が當時、マルクスの「資本論」を学習していることをよく知つていたし、新劇運動でのマルク

ス主義の議論もしてゐたので、すぐに推薦状に署名していただけた。こうして私の日本共産党員としての第一歩が始まる。

しかし、当時の府庁には共産党の組織はなく、上京府税事務所の一人と京都地方裁判所の事務官の二人とともに活動を開始する。その二年前の1948年7月31日にはマッカーサー書簡にもとづく政令201号で全官公労働者から団体交渉権とストライキ権を剥奪されていた。したがつて、上京府税事務所、京都地方裁判所の人たちの氏名は所謂「ペンネーム」であつた。

レッド・ページの嵐と府職組

その頃、国は地方自治体に対する行政整理を開始し、その手段として定数条例を用いて主に共産党員を狙い撃ちする事実上のレッド・ページが強行された。政府は1949年5月に「地方公共団体の人員整理について」の通知を出し、都道府県と五大都市の整理率を非現業3割、現業2割として指示してきた。

京都府では保険課、世話課、失業保険課、職業補導所などで職員が始められた。職員の理由は、業務量の減少、能率の向上などであった。

最初は女性職員から攻撃が始まつた。私が就職したとき、空席の椅



1953年、南山城の大水害に府職組は1ヵ月にわたり救援隊を派遣した。

(『京都府職員労働組合運動史(上)』より)

京都府庁細胞の建設と闘い

前述のように府庁細胞は職場の異なる三人の党員で活動が始まった。当時の日本共産党は第六回党大会直後でイデオロギー闘争が軽視され、さまざまな対立や論争が民主集中制の原則を逸脱して行われていた。

日本共産党が、こうした複雑な状況に直面していたときに1950年1月6日、コミニフォルムの機関紙「論評」にたいし党中央委員会政治局は、「日本情勢について」に関する「所感」を発表し、「論評」を批判した。こうして「論評」と「所感」をめぐり党内の無原則的な綱領的、戦術的、組織的混乱が始まつた。基本的に、日本革命の外国からの干渉をめぐる問題であつて、その後、党分裂の基礎となつた。

当時、この1年前の1949年1月に国会で35人の衆議院員を当選させていた。しかし、党の紛糾・分裂のなか、GHQの指令で中央委員会全員の公職追放、アカハタ編集委

て撤回闘争に取り組む」という執行部提案を否決した。その後、解雇が確定的になつたため、執行部は総辞職をした。この執行部に前述の松村・伴の両氏がいた。

このような情勢の中でレッド・ページは京都府立医科大学でも強行された。

京都府では保険課、世話課、失業保険課、職業補導所などで職員が始められた。職員の理由は、業務量の減少、能率の向上などであった。

最初は女性職員から攻撃が始まつた。私が就職したとき、空席の椅

員などの追放、全労連の解散指令、相次ぐレッド・ページの強行などの不當弾圧が続いた。

発足した府庁細胞はこうした情勢のもとでの活動であった。そして私の属する組織は所謂、「国際派」であつた。「徳田派」から排除された全国統一會議が発行していた機関紙「理論戦線」と「新日本文学」をよりどころに活動を始める。しばらくして、保険課のI氏とN子さんと一緒に活動を始めた。しばらくして、保険課のI氏とN子さんの二人の同志を得て、Nさんは府職組でレッド・ページをうけた南部氏の影響もあり、ようやく保険課職場に党组织を確立することができた。

当時、自治労京都府連の書記局が府庁正面の西側にあつた小さな部屋に置かれていた。そこにレッド・ページを受けた橋氏、青柳氏が常駐し、女性の書記が専従として勤めていた。時々労政課の杉村直樹氏が少ない活動家としてその書記局に出入りしていた。間もなく、その書記局は労働会館（寺町四条下がる）に移転し、府職の単独の書記局となり、新しい書紀として吉村昭子氏（のち西垣姓）が就任した。社会課に平林慶子、職業課に堀昭三、西陣公共職業安定所に根岸昭三、山内貞夫、七条公共職業安定所に広瀬茂、林務課に松本顯太郎の各氏らの活動家がいた。京都労働セツルメントには尾崎克、大江洸氏が活動していた。また、府労働経済研究所に宝光井顯雅氏も

在籍しこれらの活動家は最も積極的であった。

一方、京都府立医科大学では、学

生時代に多くの共産党員とともに放校処分になつた門脇一郎氏が、助手として復職し活動を再開していた。

この大学には上田潔講師など優れた活動家がいた。看護婦の森田博子氏（のち大前姓）らの活動も始まつていた。地方労働委員会には神谷信之助氏もいた。

しかし、これら50年代の活動はレッド・ページと占領軍・政府の激しい弾圧、日本共産党の分裂のもとで極めて困難をともなつた。

私たちちは「国際派」となつていたが、その他の党員たちはどの組織に属しているのかはお互いにわからなかつた。

1951年8月にスターインが押し付けた「51年綱領」に基づく極左冒險主義の方針は京都府庁細胞の中にも持ち込まれ、この方針のもと府庁を退職し、非公然活動に入つていつた人も何人かいた。

自治体財政の赤字と 二度にわたる風水害被害

自治体の財政赤字をめぐり闘いは

1950年の第二次にわたるアメリカ

シャウプ使節団の税制改革勧告によつて今日の税制の根幹ができたが、

これは地方の財政を国が取り上げる

ものであった。加えて京都府は1950年のジエーン台風、1953年の南山城水害、同じく秋の十三号台風と立て続けの風水害に襲われたのである。ほかにも、鶴川氏が知事に就任する前の1950年1月に行われた俸給是正の影響、さらに中小企業の多い京都は1949、1950

年の不況の波を真に向から蒙つたことなど、悪い材料が重なつた。

このような情勢の下で、人件費3%の削減、定員削減、定期昇給の停止、徴税強化などの攻撃に抗して果敢な反対闘争を繰り広げた。

私はその頃、未組織であった社会保険出張所（のち事務所）の職場に労働組合を結成する活動に取り組んでいた。保険課のO氏の「条件付任用期間」の適用をめぐる不当競争反対、竹下保険課長の暴言撤回、強制配転反対、府職員の一斉昇給に伴い國費職員の待遇改善など多くの大衆闘争があつた。こうして1953年3月に保険支部の結成大会を成功させた。

この保険支部結成と同時に起つた南山城水害救援闘争に府職組から数十名、保険支部から約二十名が参加した（「府職労運動史」によれば、府職組救援隊は1ヶ月にわたつての五百数十人が参加）。その当時、イタリアのボーゲー河の氾濫で大被害があり、それにイタリア労働総同盟が

ト」を敢行した。この国際的な闘いから学んで全日自労は災害復興による就労の賃金を要求して闘つていった。闘いは長期に渡つたが住民の要請で立ち上がりた労働者階級の闘いとして注目をあつめた。

（以下、次号に続く）

教員のレ・パを報告

4月例会で関谷健さん

民主運動史を語る会4月例会が24日午後、かもがわサロンで開かれ、関谷健さん（元京都立日吉ヶ丘高校教諭）が「教員のレッド・ページと私」と題して報告しました。

関谷さんは49年10月10日、授業中に呼び出され即刻退去を告げられた當時の模様をリアルに述べました。

市高教組は「第2次のレ・パ」で威嚇され反対運動を決り、日教組も全面支援は行なはず、個人で不当競争反対運動を始めたものの、「アカの教師」宣伝で保護者会の反応は鈍かつたといいます。

あれから60年、関谷さんは日弁連のレ・パ犠牲者の「名誉回復と補償措置を」の勧告書に励まされ、署名運動を始めています。同じ日、市教委から处分を受けた峰田豊次さん（当時大将軍小学校教諭、全官公書記長、のち共産党幹部。岡山在住）とも連絡をとり近く話を聞くことにしています。

墓前祭に300人

今年は山宣の生誕120年・没後80年の年にあたり、記念事業実行委員会（安斎育郎代表）が組織され、取り組みが進められています。

3月5日の第80回墓前祭（宇治市善法墓地）には全国各地から300人が参加、その後の茶話会にも110人が集い、山宣の生涯と聞くを偲び、その遺志を受け継ぐ決意を新たにしました。

山本宣治生誕120年・没後80年で記念出版

5月24日に講演会

山宣譚
タブーに果敢に立ち向かった義の人

小田切明徳著 つむぎ出版刊

今後、5月23日（土）夜に山宣の実家、料理旅館「花やしき」で全国交流会が、翌24日（日）午後に同志社大学今出川キャンパスで記念講演会が開催されます。また、10月には「山宣を訪ねる信州の旅」が計画されています。お問い合わせは同実行委員会事務局（宇治市職労・電話0774-22-5653）まで。

なお、記念事業の一環として、下記のとおり記念出版と、ビデオ・DVD「山本宣治の生涯」（宇治山宣会編）が制作されます。（小松正明記）

民衆とともに歩んだ山本宣治
(やまさん) 付 山宣ガイドブック

宇治山宣会編

山宣の生涯を多くの写真入りで綴るオールカラーのガイド書。激動の時代に生きる私たちに遺したものは何か。



マップ付き。A5判48頁・定価120円（税込）5月下旬刊

東京のゆかりの地をめぐる
ちに遺したものは何か。
宇治、京都、東京のゆかり

山本宣治 人が輝くとき

本庄 豊著 学習の友社刊

山宣の成長と生き方に学ぶとともに

に、その多彩な活動を山宣周辺にいた1



920年代の人びとを通して見つめ直して書かれた。山宣を知ることは、彼が生きた時代を知ることでもある。A5判160頁・定価1500円（税込）

本書は、前5巻に引き続き、96年から05年までの10年間の京都を中心とした労働運動の経過と労働行政・社会経済の流れを整理し、1年ごとの概観を付した記録。

山本宣治
人が輝くとき

テロルの時代

山宣暗殺者・黒田保久二とその黒幕

本庄 豊著 群青社刊

わざかな資料を頼りに暗殺者の足跡とその黒幕の影を追い、中国、韓国、日本各地に取材したノンフィクション。黒田を動かしていた黒幕はいったい誰なのか、日本近代史の謎に迫る。定価1

680円（税込）

京都労働運動史 (年表・資料) 第6巻

京都府発行

BOOK

役に立つデータがぎっしり

た。

年表（280頁）も貴重だが、資料編（98頁）に収められた労働運動の「集会宣言」「アピール」「仮処分申請」などの生資料、さらに最賃の推移、選挙一覧、戦後京都における政党の変遷など役に立つデータが多い。

A4判・非売品（編集兼発行）京都府商工労働観光部労政課

「東山の福祉と革新の源流を探る懇談会」発足

藤本文朗さんのよびかけで

藤本文朗さんの提案案で、「『東山の福祉と革新の源流を探る』懇談会」が活動を始めることになりました。藤本さんは、定年退職で生まれ故郷の東山に帰ってきて、民主的なつどいに参加したけれど、何か物足りなくて、福祉や革新の伝統を歴史的にとらえる必要を感じたと言います。

それは、一定期間、東山の地を離れていた者の直感かもしれません。しかし、歴史的に考えることは、過去から通じる現在の運動を、未来への展望をきりひらく歴史発展の法則のもとに位置づけることであり、離れていた者が地域に帰るために必要なことにとどまらず、地域で運動するすべての人にとってのことです。

藤本さんは、障害児教育や福祉の研究者、教育者としての経験を、今回の歴史研究の組織論にも生かしています。まず藤本さんの呼びかけに賛同した五人が集まり事務局を構成しました。藤本さんの集団研究の組織論に基づいて、発起人（民主団体や個人）の組織や、顧問（歴史研究者や福祉

分野の専門家）の要請、参加団体への呼びかけの準備を進めました。こうして、組織を固めるかたわら、顧問を受けてくださる歴史学者の助言で、事務局の藤田洋さんを中心に年表作成を進めていきました。

発足総会に四十人参加

四月四日（土）東山診療所で、発足総会を、運動団体、個人四〇名の参加で行いました。顧問を引き受けたていただいた方々は、京都女子大学教授・石田一紀氏、立命館大学教授・津止正敏氏、華頂短期大学教授・流石智子氏、種智院大学準教授・向井啓一氏、文理閣代表・黒川超信氏。

記念講演は、元東山診療所所長の来島安子先生に「じん肺検診の頃」と題してお話しいただきました。東山診療所が陶磁器労組、東山企業組合、生健会などの建設運動でできたこと、じん肺が陶磁器労働者に深刻な健康問題であったことなど、東山診療所が「高齢者医療」と「じん肺

医療」を二本柱に取り組んできた歴史をお話しいただきました。私たちの「東山源流の会」が、「過去・現れる」としている仮説を裏付ける講演でした。

参加者からは、過去の修道学区の運勢や、日吉ヶ丘高校であったレッド・バージ、今熊野学童保育所設立運動、新婦人の運動、視覚障害者の選挙投票の援助をはじめ、一九四五年一月の馬町空襲や戦後初の薬害事件であるジフテリア予防接種事件など、記録に留めたいさまざまな経験が発言としてあり、予定していた時間を超えてしました。

発起人代表として奥村和郎さんを選出しました。

今後の取り組み

今後、年表をさらに充実させていくと共に、エポックとなる出来事を記録として文章化していくことが課題となってきます。また、埋もれさせたくないエピソードをコラムの形で読み物化していくことも大切です。高層マンション建設反対運動など、運動に関わった人がいなくなると、景観 자체が地域の運動で守られ

たものであることが忘れ去られています。

「あの運動には自分も参加した」という方には執筆をお願いしたり、聞き取りで文章をまとめたりと、多くの協力を得ての集団執筆運動となります。

また、今回の記念講演のような、歴史を掘り起こす講演を中心とした集会も計画していると話し合っています。

「東山の福祉と革新の源流を探る」懇談会が、成果を上げることが出来れば、各地で「福祉と革新の源流を探る」集団研究のモデルとなると信じて進めていきたいと思っています。

訃報 小野理子さん

（伊藤哲英）

去る一月一七日未明、小野理子（みちこ）さんが逝去されました。長岡京市在住、75歳。葬儀は故人の遺志によつてご遺族だけで済ました。

専門はロシア文学、神戸大学名譽教授。京都では日ソ協会、日本ユーラシア協会の理事を長く務められ、同協会のロシア語教育にも長く貢献してこられました。

五月八日に友人たちが集まり、「小野理子さんを偲ぶ会」を行いました。

悼 塩田庄兵衛さん

東京都立大学・立命館大学名誉教授

塩田庄兵衛氏が三月一〇日に東京で逝去された。享年八七歳。かつて立命館大学教授、創刊時に本会役員であり、たびたび寄稿し、京都になじみの人が多かった。

私が塩田氏と親しく知り合つたのは同氏が一九七四年に立命館大学教授に就任されてからであるが、その専門分野である社会運動史関係の著書数冊はすでに読んでいた。経済学者の論著は往々にして難解であり、えてしてむずかしい学術用語の羅列に悩まされがちだが、塩田氏の著作にはそれがない。経済学の素養にとほしい私が読んでも抵抗がなかつた。ひとつには塩田氏が文学・演劇に及ぶ広い知識と磨かれた感性の持ち主だったので、文章が洗練されていたせいである。しかし他方で、塩田氏の学問研究がいつもひろい国民大衆のためにといふ志にささえられていたことをあらためて思はざるをえない。

塩田氏は学界の王道をあゆむ秀才だった。「学徒出陣」が強行された一九四三

をつくり、河上さんの『貧乏物語』と『自叙伝』の音読で数百人の会員を集め、時に専門家の小講演会を開き、その成果を数冊の書物として刊行した。演劇が好きだった塩田氏らしいしごとである。

立命大を定年退職して東京に帰住されからも、京都の催しで講演等をお願いすると、喜び勇んで受けられた。私は「非核の政府を求める会」の総会で毎年上京しては、常任世話人の塩田氏と顔を合わせるのを楽しみにしてきた。近年は病気のために入院をくり返していると、いう話をきかされたが、持ち前の明るさが、その実感を感じさせなかつた。やがて私自身も世話をとしているところだ。

藤一郎氏、経済学部の塩田氏だつた。その頃、大河内一男教授指導の下で、マックス・ウェーバーに傾倒したように聞いている。マルクス主義文献に接したのは戦後からのことだったという。それからの塩田氏の全業績の紹介は私の手に余る。

学問研究をひろく 国民大衆のために

岩井忠熊



京する機会がなくなつた。そこに今度の訃報である。つきない思い出をしおびつ、故人の冥福を念ずるばかりである。

(本会代表)

(写真は『京都にて』より)

塩田氏は『京都にて』一九七四一
「故塩田庄兵衛先生とお別れする会』は五月二五日午後六時から
東京都千代田区神田錦町三の二八
の学士会館で行われます。

ジウムを開くことにしています。(Y)
塩田氏が京都にあって「河上肇音読会」
で岩井忠熊先生を座長とする「NHK
スペシャルドラマ『坂の上の雲』」を考
える市民懇談会が結成され、7月18
日(土)午後、京大会館で市民シンボ

NHKスペシャルドラマ
「坂の上の雲」を考える

7月18日に市民シンボ

NHKは今年秋からスペシャルドラマと銘打つて、日曜日の夜に「坂の上の雲」を放映する計画をすすめています。しかし、「坂の上の雲」の映像化は、作者の司馬遼太郎自身が生前、「誤解を招くおそれがある」として承諾しなかつたことからも明らかのように、軍国主義を鼓舞し、改憲に向けた世論操作に使われるおそれもあります。

この点で、「坂の上の雲」は、そこで描かれていく日露戦争をどう評価するかという歴史観をめぐって、田母神論文と同質の問題をかかえており、これをNHKが日曜日の大河ドラマの時間帯を使って放映することは、その影響力の大きさからいって無視できないもの。また、中国や韓国など北東アジアの人びとに對しても「坂の上の雲」の放映は様々な摩擦を引き起こすおそれがあります。

そこで、中島晃弁護士らのよびかけで岩井忠熊先生を座長とする「NHKスペシャルドラマ『坂の上の雲』」を考える市民懇談会が結成され、7月18日(土)午後、京大会館で市民シンボ

「ETV特集・鶴見俊輔」が紹介した「占領下の原爆展」

「沖縄に送られる」と覚悟した

小畠 哲雄

四月十一日の夜、NHK教育の「ETV特集・鶴見俊輔」を見た。

いわゆる「玉音放送」の中で、「敵は新たに残酷なる爆弾を使用し」というのを聞いて、鶴見さんは、憤激したそうだ。それまで日本が何をしてきたのか、という思いからだつたという。その時には、この「爆弾」が原子爆弾であることを知らなかつたとのこと。その鶴見さんに、原爆の被害のすさまじさを知らせたのは、「沖縄に送られること」までも覚悟して「原爆展」に取り組んだ京大同学会の「総合原爆展」であった。

一九五一年の京大的学生が、「沖縄に送られること」までも覚悟して「原爆展」をやつたということは、鶴見さんの記憶の中に、かなり強く刻み込まれているようだ。「憲法9条京都の会」の発足の集まりの記念講演でも、まったく同じ表現で、平

和を求める京都の伝統について語つておられたからである。

「沖縄に送られる」というのは、アメリカ占領軍による「軍事裁判」で「重労働」の刑に処せられることを意味していた。現に、その前の年、警察官にビラをまいた京大の学生が、はじめは「地方公務員法違反」「占領政策違反」として軍事裁判にかけられ、「重労働二年」の刑に処せられたことがあった。しかし、彼は沖縄ではなく、山科の刑務所にいた。



治安維持法はなくなり、新憲法では、「基本的人権」が謳われていたが、占領軍司令官の命令は、超憲法的なものであり、「原爆の被害」について公然と語ることは、やはり

「虎の尾を踏むようなもの」であつた。「原爆展」では、大津市で模造紙一枚の「スチール展」をしていた私が逮捕されたのが、のちに「歩行者の足をとめた」ということで「道路交通法違反」であつた。大津市警の警備課長は、「ほんとうはせられたことがあつた。しかし、彼は沖縄ではなく、山科の刑務所にいた。

占領軍から、「サンフランシスコの講和会議を前に、平和と名のつく集会は一切禁止」と言わ

れども、そのことを表に出すこともアカンと言われるとるんや」と私に洩らしてくれた。「原爆展」では

茨木市で大阪市大の学生が一人逮捕されたがすぐに釈放された、とい

う事実もある。

「沖縄送り」とまで

は覚悟していかつた

かもしだいが、少々

の弾圧はあるものと腹をくくらなければ何もできなかつた時代であつた。一九五一年の京都大学には、「被告」「被処分者」の学生が少なからずいた。「占領下の『原爆展』」に私はこう書いている。



私は、あのころの日本は事実上、アメリカ軍の「戒厳令」のもとにあつたのではないかと思うのです。それも戦前の日本の軍部のようなやり方ではなく、その壁にぶつからないかぎりは、その存在さえもわからないようなたいへんたくみなやり方でした。私は、その壁にぶつかった経験者の一人として、このことを伝えておく義務があると考えています。

せつかく軍隊がなくなり、戦争もしないことになつたのに、朝鮮戦争を契機に「警察予備隊」という名の「軍隊」が発足した時代でもあつた。学生のほとんどが戦争を身をもつて体験していた。私を含めて、原爆展に取り組んだ者の中には、旧陸海軍の「将校生徒」だったものが少なからずいた。「再軍備」にあたつて「即戦力」として引っ張り出されるのではないか、という思いに私たちが突き動かされていたことはたしかである。

忘れ得ぬ人

松村 茂さん



「しのぶ会」会場に飾られた松村茂さんの遺影（弘子夫人が撮影）

京都民報社長・京都中小企業家同友会理事など歴任。著書に『フルートをふくゆうれい』（偕成社、1975年）、『京の老舗』（正・続・完の3冊、サンブライト出版、1979年）、『京の祭と歳時記』（ナンバー出版、1985年）など。2005年11月21日原発性肝細胞癌のため永眠。享年78歳。

り十数人の若い社員をかがえ、編集会議では魅力ある紙面づくりに毎週侃々諤々の議論を繰り広げていました。松村さんは社長でありながら「文化面」を担当し、こつこつ京都のまちを歩きまわり、老舗や著名作家（山村美紗、和久峻三、邦光史郎ら）、中小企業経営者らの取材や連載を成功させました。

私は編集長として、「政治」「社会面」の企画、「解説」「創価学会」「統一協会」などタブーに挑戦、スクープを連発しましたが、一般紙記者らからは評価されたものの、読者の拡大は「文化欄」の魅力によるも

4月18日午後、伏見区の「そぞろ館」で「文学を愛した松村茂さんをしのぶ会」が開かれました。地元伏見の人たちや児童文学関係者らが会場いっぱいに詰めかけ、文学を愛し京都や伏見を愛した松村さんの生きざまや業績を振り返りました。

松村さんは1927年

3月27日、伏見に生まれ、43年、16歳で大阪陸軍造兵廠少年音楽隊に入隊。

45年（18歳）終戦で京阪電鉄に入社、運転手に。50年、レッド・ページで解雇。55年、たかせ保育園職員、結婚。61年（34歳）京都民報社入社。以後社長を96年に退任し、会長になつてからも肝細胞癌の治療を続けながら執筆や文化運動に関わってきました。

文学と京都と伏見を愛した人

湯浅俊彦

98年12月、かもがわ出版から『わが愛する京都』と題するエッセイ集（私家版）を刊行されました。この中

で松村さんの文化人との幅広い交流がいきいきと記されています。当時、「出版を祝う会」を開こうと企画して松村さんらしいと思いました。

夫人の弘子さんは、「しのぶ会」の席で「私に心をこめて向き合ってくれた」と松村さんの思い出を語りました。

私が京都民報に入ったのは65年、紙面がタブロイド判から大判になるときでした。当時、松村さん一人で取材から編集までこなしていましたが私が入って2人になり、共産党府委員会の片隅の机2本が「民報社」でした。毎週毎週お互いに徹夜作業などよく続いたものだと思います。

いわゆる「身内」の取材にとどまるのではなく、「保守」の人も含めどんな人にもアタックしていました。丁寧な手紙を送り、電話でアポを取り、何より相手の話に耳を傾ける取材でした。民報に載せた記事で信頼を得て多くの人が協力者となりました。

した。

の方方が大きかつたと思います。

京都の民主運動史を語る会

総会のお知らせ

と
き

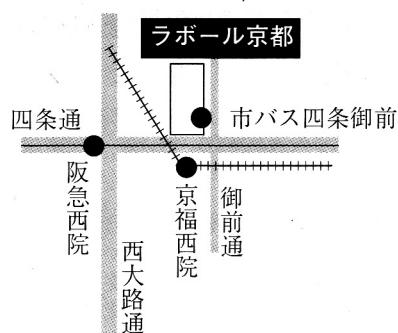
6月27日（土）午後1時30分

ところ

ラボール京都6階北会議室

京都市中京区壬生仙念町30—2

（四条御前北）
電話075-801-5311



小講演

「『夕刊京都』創刊の頃」

講師 一ノ瀬秀文さん（大阪市立大学名誉教授）

一面「この一枚」に掲載の通り、一九四六年

五月に創刊された「夕刊京都」は、戦前反ファシズム人民戦線の立場から文化的評論や世界の

ニュースを伝える隔週刊誌『土曜日』（一九三六年七月創刊、翌年一月停業）の復刊を構想

したものだったといわれる。「夕刊京都」とはどんな新聞だったのか。結集した左翼文化人、二・一スト、レッド・ページなど創刊から四年間の記者生活を振り返りながら語っていただく。

小講演のあと総会をおこないます。会員外のみなさんもふく
め多数のご来会をお待ちしています。

（会員外の参加者は資料代三百円が必要です）

情報 スクランプ



丹後で倉岡愛穂墓前祭

丹後町出身の反戦教師・倉岡愛穂（燎原）177号で紹介が神戸の御影警察署で拷問により殺されて72年目の4月9日、京丹後市丹後町鞍内で墓前祭が開かれた。梅の花が香る墓前には21人が参加、遺族の倉岡澄男氏や丹後地方の元教員らが愛穂の生涯から学んだことを語った。

私たちにとっての加藤周一周

フォーラムin京都・6月20日に

昨年末亡くなった評論家・加藤周一氏を偲びその遺志を継ぐついが6月20日（土）午後、立命館大学朱雀キャンパスの大ホール（JR二条駅東）で開かれる。一海知義・神戸大名譽教授らの講演のあと桜井均、ジユリー・ブロック氏らによるパネル・ディスカッションなどが予定されている。立命館大学国際平和ミュージアム、かもがわ出版などによる実行委員会主催。無料。

催し案内
岡部伊都子回顧展
5月31日まで立命館
大学国際平和ミュージアム。

第54回京都母親大会 5月31日（日）
1時～4時、綾部市・中丹文化会館。
小森陽一氏の講演がある。

劇画「マルクス・資本論」発刊記念講演会 6月7日（日）午後1時30分～5時30分、京都アスニー第8研究室。石川康宏・神戸女子学院大学教授と漫画評論家・紙屋高雪氏が講演する。参加費1000円。主催・申込みはブックセンター「本の風」（フックス075-415-7900）



▼「夕刊京都」に興味があり記者だけた一ノ瀬秀文さんに寄稿をお願い

し、また総会でも講演してもらうこ

とに。マイクロフィルムで読むその

紙面の面白いこと。終戦直後の京都の庶民生活や民主・文化運動が躍動

していました。講演が楽しみです。

▼伊藤晃さんからの寄稿は長文のため少し削って掲載しました。志摩肇さんからのエッセーは紙面の都合で次号に掲載します。引き続き投稿をお待ちしています。

▼4月19日の昼すぎ、自転車に乗つていて突然左半身が麻痺、動けなくなり救急車で病院へ。幸い一過性の

脳血栓ですが回復、MRI検査でも異常はなく元通りの生活をしていますが、健康を過信していたので少々ショック。

（湯浅）